新　　聞
〔第３種郵便物認可〕

聴覚・言語障害者に110年以上寄り添う

毎日社会福祉顕彰受賞「福岡ろうあ福祉会」

「利用者や職員の励みに」

110年以上にわたり聴覚・言語障害などがある人たちに寄り添う事業を展開してきた社会福祉法人「福岡ろうあ福祉会」＝福岡市西区＝が、第52回毎日社会福祉顕彰を受賞した。山田裕嗣理事長(74)は「100年前に携わった方々に顕彰を贈りたいです。利用者や職員の励みになります」と喜ぶ。【山崎あずさ】

利用者らと手話でコミュニケーションを取る福岡ろうあ福祉会の山田理事長（左）

法人の源流は明治40時、県内には視覚・聴覚障害者の学校がなく、1909年に中途失明者が中心となり福岡盲唖学校を運営する社団法人「福岡県盲唖教育慈善会」を設立(後に学校は県営)。大正中期には聴覚障害者の働く場として株式会社「聾唖工芸品製作所」が創立され、慈善会は事業に協力した。紳士服や木工製品を作っていたが、採算が取れず解散。慈善会が製作所の作業を継承し、後に「福岡ろうあ福祉会」となった。

現在は、主に障害者支援施設「工芸会ワークセンター」と聴覚・言語障害者の養護老人ホーム「田尻苑」を運営する。ワークセンターでは、18～90歳までの約80人が生活するほか、市内から5人が通所する。利用者らは家具製作を担う「木工」や、白衣やエプロンなどを作製する「縫製」、菓子箱を折る「軽作業」などの4係で仕事に励む。

縫製の作業場では、利用者がミシンを使っていた。職員が手話で話しかけると、身ぶり手ぶりで表情豊かに応じる。山田理事長は「体全体を使って表現していて、生き生きと言葉が伝わってくる。そういうやりとりが楽しみでこの世界にいます」と顔をほころばせる。

一方、田尻苑は92年、九州初の聴覚・言語障害者専用の養護老人ホームとして開設。60代から100歳までの50人が暮らす。聴覚障害者向けの老人福祉施設は全国に10カ所しかなく、九州では今も田尻苑だけだ。聴覚障害者は、地域で生活する中で周囲とコミュニケーションを取れずに孤立する場面が少なくない。利用者が自分らしく快適に暮らせるよう、ほとんどの職員が手話を習得している。

福祉会は長年、地域に開かれた施設であることを基本方針に掲げてきた。敷地内に古紙のリサイクルステーションを設置したり、利用者らが公園を清掃したりしている。秋にはワークセンターで祭りを開くなど、地域と交流できる場も目指してきた。山田理事長は「障害のある人が、社会の一員として当たり前に地域で生活していることを知ってもらえればいい」と相互理解につながることを願う。

施設では、聴覚・言語や視覚などの重複障害がある人の利用も増える。「時代や環境の変化に適応しながらサポートできるように事業を続け、次にバトンタッチしていきたい」。山田理事長は前を見据える。

毎日社会福祉顕彰決まる

福祉の向上に尽くした個人、団体を顕彰する第52回毎日社会福祉顕彰（毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団主催、厚生労働省、全国社会福祉協議会後援）に、全国より推薦された19件から次の３件が選ばれました。

受賞者には賞牌（しょうはい）と賞金（各100万円）が贈られます。贈呈式は10月21日に東京都千代田区内で行う予定です。

（24面に受賞者のプロフィル）

◇中西正司さん（特定非営利活動法人ヒューマンケア協会代表＝東京都八王子市）

◇特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス（小川真吾理事長＝京都市下京区）

◇社会福祉法人福岡ろうあ福祉会（山田裕嗣理事長＝福岡市西区）

正11年10月23日 第3種郵便物認可 ©毎日新聞社 2022（日刊）

MAINICHI

毎日新聞

9月29日（木）

2022年（令和４年）

聴覚障害支援の先駆

社会福祉法人 福岡ろうあ福祉会

（山田裕嗣理事長＝福岡市西区）

前身は福岡盲唖（もうあ）学校開校を目指し1909年に設立した社団法人「福岡県盲唖教育慈善会」で、国の障害者施策が整う前から先駆的な事業を展開してきた。利用者が手話を用いて過ごせる障害者支援施設「工芸会ワークセンター」や、聴覚・言語障害者の養護老人ホーム「田尻苑」を運営。「施設を必要とされる方のよりどころとなれるよう、内容を充実させ職員の技量を磨いていきたい」と意気込む。